

# 里の語りべ

14

小野川の逸話 第2話

## 佐原を盛り上げる 住民の心意気

語り：越川 悦子さん(佐原イ)



▲明治15年、小野川に架か  
った協橋  
▶写真右手奥が忠敬橋から  
見た昭和6年当時の三菱館

明治13年にね、東京の日本橋に川崎銀行が創立されたのと同時に佐原に出張所が開業したの。三菱館のことよ。全国でもいち早く出張所ができたのは、小野川を中心に大きなお金が動いていたからでしょうね。最初は瓦屋根の和式だったけど、大正3年に時代の先端をいく赤レンガ造りになってね、これは東京駅と同じデザインで完成も同じ年、それこそ佐原が東京と張り合えるくらいにぎわっていたからなのよ。昭和に入り三菱銀行となり、平成3年に県指定文化財となった、そして今も隆盛を極めた証しとして香取街道すじに凜として建っているの。

そうそう、忠敬橋のあるところ、以前は協橋かえいばしという橋が架かっていたのを知ってる？ 明治の初期、佐原の商人たちが上京した時、神田川の万世橋を見て感動し、「佐原にもこんな橋があったらいい」と発起人となって寄付を募ったの。石造りの隻眼橋せきがんはとても高価だったにもかかわらず、工賃を公的資金に頼らず、みんなの寄付で賄い、みんなの協力でできたから、協の字を取り「かなえばし」と名付けられた。東京と同等か、それ以上にいい町にしたいという佐原住民の心意気の現れだったんでしょね。今、この重厚な橋が再現できたら…と願うのは私だけじゃないと思うよ。

さて、このような商人の町だけに銭大事なわけだけど、ある時、銭を置いても駆けつけなければならない事件が起こったの。

▶次号へ続く

# 香取文芸

## 応募方法

はがき1枚に俳句2句・短歌2首のどちらか  
と、本名、住所、電話番号を記入し、〒2897・  
8501 広報かとり「俳句または「短歌」の係まで。毎月20日まで  
の到着分(12月は15日締切)を審査し、翌々月号に掲載。掲載される  
作品は、選者により評を踏まえて添削される場合があります。

## 俳壇

谷本 元子選

広報へ一句練り込む秋の宵

宮崎 弘(白井)

評 「農業92才…」と、力強い文字で毎月ご投句される。収穫の喜びに浸りながら、実直に俳句を詠まれる作者のうしろ姿が窺える。「練り込む」の表現に俳句への一途さも、どうぞいつまでもご健吟を…。

存へて又食べられる今年米

関 いさお(三島)

空叫び大地潤す大夕立

関根 大徳(小見川)

夕暮れや刈田の後の鷺の群れ

大川 千代子(加藤洲)

行く秋やこずゑの鳥も天仰ぎ

根本 俊爾(本矢作)

## 歌壇

松本 静泉選

縁側に独り端居し見上ぐる月狭庭の隅に鈴虫の聲

宮崎 弘(白井)

評 縁側に独り座って、煌々と照り渡った十五夜の月を仰ぎ見ている。庭先の萩の葉が光って明るく、鈴虫の鳴く声もする情景が浮かぶすてきな歌です。

息ひそめ見入るフジタの裸婦の絵に乳白色の永久とわの美と見つ

菅谷 文子(神生)

さざ波の寄する湖畔に佇みて見渡す筑波嶺夕霞せり

鈴木 一満(八筋川)

裏白き新聞広告とどきたり歌詠み書かむと心ときめく

長嶋 理子(高萩)

蟬螂の子がどこからか入りきて小首かしげて吾を見上げり

関 いさお(三島)